

シンガポールの「水」事情について

みなさま、あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。今回は、日本ではあまり知られていないシンガポールの「水」事情についてお伝えいたします。

◆意外に厳しいシンガポールの水資源

冬真っ只中の東北地方、みなさまいかがお過ごしでしょうか？ピンと張った肌寒い空気の中、気持ち新たに一年の計画を立てている方も多いことでしょう。一方、私が駐在するシンガポールは一年を通して温暖な気候であり、お正月と雖も日中の気温は30度。雨季に当たる最近は、毎日のようにスコールに見舞われています。そんなシンガポールの年間降水量は日本（東京）の約1.5倍。さぞかし水資源の多い国だろうと思いきや…、全くの逆なのです。現在、全人口に飲用水を供給できる体制がなんとか整っているものの、国土が小さく平坦な地形が多いシンガポールでは貯水が難しく、建国当初から水資源の確保に向けた努力を続けてきました。



マリーナ湾を臨むマーライオン



NEWaterの施設外観

◆シンガポールの4つの蛇口

シンガポールにおける水資源の供給源は「4つの蛇口」と呼ばれています。1つ目の「NEWater（ニューウォーター）」は、下水をろ過し、生活用水に再生するユニークな技術、2つ目が「海水の淡水化」です。島国であるシンガポールでは、建国時より海水の脱塩技術開発を進めており、現在では国内に5つのプラントを有しています。これら2つの蛇口により水需要の約6割を賄っているとされており、同国のウォーターテックは世界からも高く評価されています。3つ目の蛇口は「貯水池」です。勢いよく水を吐き出している「マーライオン」が位置するマリーナ湾、実は海ではなく雨水を溜めた「貯水池」なのをご存知でしたか？インフラと観光を両立する同国の手腕には脱帽ですね。

こうした技術革新が進んだ背景には、4つ目の蛇口「輸入水」が関係します。建国時のシンガポールは水資源のほとんどをマレーシアからの輸入に頼っていましたが、この権利は2061年に満了予定であり、どうしてもそれまでに「水資源の自給」を実現させる必要があるのです。現在でも需要の2割程度を「輸入水」に頼っているシンガポール、2024年も引き続き、「水資源の自給」に向けた努力を続けていくことでしょう。

（七十七銀行 シンガポール駐在員事務所 野田 悠平）

※本稿は、仙台経済界 2024 1-2月号「77グローバルレター」欄に寄稿したものを一部加工・修正して掲載しています。

【お問合せ先】

七十七銀行 市場国際部 アジアビジネス支援室
TEL.022-211-9880

【Global Letter NEXT ホームページ】

その他の記事はこちらからご覧ください。

https://www.77bank.co.jp/kokusai/globalletter_next/

本紙記載の内容につきましては、当行が信頼できると考える情報に基づき作成しておりますが、その正確性、信頼性、完全性を保証するものではありません。法律上、会計上、税務上の助言を必要とされる場合は、それぞれの専門家にご相談いただくようお願い申し上げます。